

桜川市の概要・位置・地勢／桜川市章／市民憲章
市長挨拶／市の花・木・鳥 01

巻頭特集
桜川物語 平安の古から現在へと流れる文化遺産 02

Story ① 幻の桜源郷 04
Story ② 桜川流離譚 04
Story ③ 眞壁氏の興隆 05
Story ④ 青木村仕法 06

桜川市総合計画 07

第1章 自治・市民と行政が奏でる交響曲 08
技人File ① 08
コラム 眞壁のひなまつり 09
技人File ② 10
技人File ③④ 11

第2章 安心・安全・安心を支える交響曲 12
Topics No.1 子育て支援事業 12
Topics No.2 桜川市学校給食センター 13
技人File ⑤ 14
Topics No.2 桜川スマイルクラブ 15
Topics No.3 桜川市高齢者員守りネットワーク 15

第3章 育成 未来へ奏でる育みの交響曲 16
Topics No.4 眞壁伝承館 16
Topics No.4 眞壁伝承館 17
技人File ⑥ 18
技人File ⑦ 19
桜川遺産 20

第4章 調和 快く美しい暮らしの交響曲 22
技人File ⑧ 22
コラム 東日本大震災復旧作業 23
技人File ⑨ 24
Topics No.5 災害対策 25

第5章 自立 運し発展する創造の交響曲 26
技人File ⑩ 26
コラム 新規作物研究会 27
技人File ⑪ 28
技人File ⑫ 29
技人File ⑬ 30
技人File ⑭ 31
技人File ⑮ 32
技人File ⑯ 33
桜川名産型録 34
さくがわ歳時記 34

桜川市ガイドマップ 36
空から見た桜川市／市勢資料 38
桜川市議会／公共施設 39

「やすらぎのまち 桜川」を目指して

桜川市長
大塚 秀喜
Hideki Otsuka



桜川市は三方を阿武隈山系の山並みに囲まれ、市名の由来にもなりまた「桜川」が中央部を流れるなど緑豊かな自然環境に恵まれております。JR水戸線や北関東自動車道、国道50号などの幹線が通り、地域から採れるみかげ石を利用した石材業や平野部の肥沃な土地を利用した農業など、地域資源を活かした地場産業が息づいているまちです。

また、茨城県初となる国の重要伝統的建造物群保存地区の「眞壁の町並み」をはじめ、会期中10万余人のお客様が訪れる「眞壁のひなまつり」や国指定文化財・天然記念物「桜川のサクラ」、「高峯の山桜」など、数々の歴史的遺産や名所旧跡が現存しております。

市の将来像であります「伝統と豊かな自然に恵まれた田園文化都市」やすらぎのまち「桜川」を目指して、第1次総合計画に掲げた5つの大きな柱「自治」「安心」「育成」「調和」「自立」のまちづくりを基本理念に、市民の皆様と行政の協働によって日本の原風景の田園風景や歴史・伝統を守り育て、個性と魅力にあふれた元気なまちづくりを進めてまいります。

この『市勢要覧』は、市の施策や活気あふれるまちの様子など、様々な姿を紹介するものです。桜川市の魅力を本誌から感じ取っていただければ幸いです。

桜川市の概要・位置・地勢
City profile & access

桜川市は首都圏から約70km圏内、茨城県の中西部に位置し、総面積は179.78km²となっております。

北は栃木県（真岡市・益子町・茂木町）、東は笠間市・石岡市、西は筑西市・栃木県（真岡市）、南はつくば市と隣接しています。

北の高峯・富谷山、東の雨引山・加波山・足尾山から南の筑波山に連なる山々に囲まれた平野部のほぼ中央を桜川が南下し、市の南北軸を形成しています。

その環境のもと、上野沼や大池、つくし湖など、多くの湖沼を有し、水資源の確保および親水空間として活用されています。

また、この地域で採れるみかげ石を利用した石材業や、平野部の肥沃な土地を利用した農業など、地域資源を活用した地場産業が息づいています。



桜川市の花・木・鳥
Official city flower, tree & bird

市の花 ヤマユリ Gold-banded lily



ヤマユリは、ひときり大きな白い花を咲かせ、かなり速くからも気がつくほどの、強い甘い香りを放ち、桜川の里山に多く自生しています。花言葉「荘厳」に表されるとおり、夏の雑木林の中で厳かに堂々と咲く花で、桜川市を象徴するかのようです。

市の木 サクラ Cherry tree



桜川市の美しい桜は、謡曲「桜川」に詠われるなど、市民の生活の中に根付いています。春になると、市内の山々はほんのりと桜色に染まります。場所によっては色々な風情が楽しめます、まさに市のシンボルとしてふさわしい木です。

市の鳥 ウグイス Japanese Bush Warbler



自然豊かな当地域では、市街地の公園や庭先でウグイスの鳴き声がよく聞かれます。澄んだ鳴き声は春を告げる鳥として広く親しまれ、誰からも愛される桜川市の象徴です。

桜川市章
City emblem



3つの桜の花びらは、2町1村による対等合併「桜川市」の協調と発展を表しています。中央のダークブルーは筑波山、ライトブルーは市の中央を流れる桜川を表しています。桜・山・川は市のシンボルであり、その豊かな自然環境に生まれ、輝く未来へと歩む「桜川市」の姿を表現しています。

市民憲章
Citizens' charter

Citizens' charter

わたしたちは、伝統と豊かな自然に恵まれたふるさとを愛し、限りない繁栄と幸せを願って、市民憲章を定めます。

- 1、市民と行政が協働で住みよいまちをつくります。
- 1、互助と信頼を深め、安心とやすらぎあるまちをつくります。
- 1、教養を高め、豊かな心と健やかな体を育むまちをつくります。
- 1、豊かな自然と歴史・文化が調和する潤いのあるまちをつくります。
- 1、地域資源を活かし、活力に満ちた豊かなまちをつくります。

桜川

人の営みは常に水とともにありました。メソポタミアをはじめとする古代文明の多くが、大河の流域において発祥しているのは偶然ではありません。河川がもたらす豊かな恵みは、人間が農耕を基盤とした文化的な社会を築く上で、欠くことのできない要素といえるでしょう。

桜川市を縦断するように流れ、市の名前の由来ともなった二級河川・桜川もまた、古来よりその流域の人々に生活の糧を与えるとともに、文化の源ともなってきました。この巻頭特集では、後世に語り伝えるべき文化遺産として、桜川を舞台に織り成されてきた歴史絵巻の数々をひもときます。

平安の古から現在へと流れる文化遺産 The Story of Sakuragawa

巻頭 特集



Story No.1 まぼろし おうげん きょう 幻の桜源郷

かつて平安の歌人から江戸の将軍までを魅了し、東国一の桜の名所とうたわれた桜川。その伝説とは。

鎌倉時代に制作された絵巻物上巻本三十六歌仙絵（重要文化財）に描かれた紀貫之像

常よりも

春辺になれば桜川

波の花こそ

間なくよすらめ

紀貫之

紀貫之も詠んだ桜川

三十六歌仙のひとり紀貫之は、平安時代前期に活躍した歌人です。平仮名による最初期の文学作品『土佐日記』を著したほか、醍醐天皇の命により史上初の勅撰和歌集である『古今和歌集』を編纂するなど、日本文学史において非常に重要な存在といえるでしょう。

この貫之が、桜川について詠んだ歌が『古今和歌集』から40余年後に編まれた『後撰和歌集』に収録されています。「常よりも春辺になれば桜川 波の花こそ間なくよすらめ。現代語に訳すると、「春になると桜の花びらが川面をおおって流れていく。少しの間も空くことなく、壮観な眺めだ」といった意味になります。なんとも幻想的で、桜の儂い美しさに彩られた桃源郷のようなイメージを抱かされる名歌です。

それにしてもなぜ、京の都で官職に就いていた貫之が、遠く常陸国（現在の茨城県）に流れる桜川に材を取って、このような歌を詠むにいたったのでしょうか。この歌には「さくら河といふ所ありとききて」という詞書が付されています。このことか

ら、貫之が実際に当地を訪れたのではなく、人づてに話を聞き心を動かされて詠んだ歌だということがわかります。桜の名所としての「桜川」の評判が、遠く平安京にまで知れ渡っていたという事実が驚かされます。遙か千年の昔、春の桜川には、歌に詠まれたような光景が広がっていたのでしょうか。貫之がそうしたように、その有り様を想像してみるのも一興でしょう。

江戸を彩る桜の供給地

桜川の桜は古来、「西の吉野、東の桜川」と称され、その美しさを讃えられてきました。名勝・桜川のかつての威光を知る上で欠かせないのが、江戸時代における桜の供給地としてのエピソードの数々です。

徳川三代将軍家光が寛永年間に、四代将軍家綱が正保年間に、桜川の桜を隅田川堤に移植させたのははじめ、天文年間には八代将軍吉宗が、宝暦年間には九代将軍家重が、多くの苗木を江戸の各所に移植させたと伝えられています。現在の皇居や、上野公園・飛鳥山公園・新宿御苑・小金井公園にあたる場所です。その数は推計でおよそ2万本に

ものぼるそうです。これらの事実から、江戸の花見の名所づくりに、桜川の桜は欠かすことができない存在であったことがわかります。水戸黄門として有名な徳川光圀も、桜川の桜に魅せられた一人です。その惚れ込みようは、借楽園前を流れる見川川（のほとりに桜川の桜を移植し、その川を「桜川」と名付けてしまうほどでした。

現代に蘇る幻の桜源郷

明治に入ると、当市出身の俳人石倉翠葉や、日本植物学の創始者三好學博士による研究・出版活動により、再び脚光を浴びることとなった桜川は、大正13年に国の名勝指定を受けるにいたりました。昭和49年には、桜川の桜が国の天然記念物に指定されています。

そして現在、画一的なソメイヨシノとは違い、一本ごとに色、形、匂い、開花時期までが異なる多彩な山桜が群生する桜川の景観は、その価値が広く見直されてきています。地元の人々の地道な保護や整備、広報活動の成果もあって、紀貫之も夢見た「幻の桜源郷」が、今また蘇りつつあるのです。



桜川市総合計画

伝統と豊かな自然に恵まれた田園文化都市

～やすらぎのまち 桜川～

桜川市では、後期基本計画において市としての一体感の強化、個性の発揮（イメージの強化）、組織や人材育成の充実などを通じ、「自治」「安心」「育成」「調和」「自立」の5つの基本理念に基づき、将来像である「伝統と豊かな自然に恵まれた田園文化都市 ～やすらぎのまち 桜川～」の実現を図ります。そのために5つの基本政策を定め、市民と行政の協働によって、日本の原風景である田園空間や歴史・伝統を守り育て、個性と魅力にあふれ、だれもが安心して住み続けられるやすらぎのまち桜川市を目指していきます。



Story No.4

青木村仕法

姿を変えながらも、今も桜川上流に在り続ける青木堰。
その遺構が物語る、二宮尊徳が成した一大復興事業とは。

明治時代の青木堰。尊徳が再建した当時の姿を窺い知ることができます。

青木村が陥った窮状

青木堰は、戦国の昔から桜川の上流青木地内にかかる堰です。この堰のお陰で水田には水が貯えられ、青木村（現桜川市青木）は良質の米を産出する恵まれた土地でした。しかし川が急流であったことから、堰は増水のたびに流され、改修に多大な費用がかかっていたいました。

青木村は江戸の初期から幕府領でしたので、地元の負担は大きくありませんでしたが、1708（宝永5）年に旗本川副新右衛門頼賢の知行地となり、幕府の支援が受けられなくなると、堰は壊れたまま放置されるようになりました。その結果、水不足が慢性化し、米の収穫量は激減してしまっていたのです。農家も離散や



岡本秋暉による二宮尊徳56歳の肖像。身長182cm 体重94kgの巨漢であったといわれています。

移住を強いられ、元禄年間には130戸あった家が39戸まで減少してしまいました。

類例のない工法で堰を改修

この村の危機を救ったのが、小田原（神奈川県）出身の農政家二宮尊徳（金次郎）です。当時、知行地4千石の復興事業に成功した二宮尊徳の名は、近隣諸国に知れ渡っていました。その評判を知った名主館野勘右衛門以下37人は、1831（天保2）年、尊徳のもとに赴き、青木村の復興を助けてくれるよう直談判したのです。その熱意に打たれた尊徳が、青木堰の再建に着手したのは1833（天保4）年のことでした。

尊徳は自ら設計図を引き、桜町陣屋から連れてきた大勢の作業員や村人らを督励し、当時、工期50日、工費100両余掛かるとされた難工事を10数日、約60両で完成させ、世間を驚かせました。この目覚ましい成果は、

尊徳流の仕法（復興計画）の有効性を実証するものでした。作業員達には用意した酒、餅を自由に飲み食いさせ、破格の賃金を支給して士気を高め、作業の能率を上げました。また、建設現場の上流に綱を渡して堰の型枠となる小屋を作り、綱を切り落としたあと、岩石を投げ込んで沈めるといって、前代未聞の工法を用いたのです。

復興事業で豊かな村に

「青木村仕法」と呼ばれた青木村の復興事業は、荒れた田畑の復元、新田開発、用水路、道路、橋の建設、神社仏閣や民家の屋根のふき替えから農民の借財返済にまでおよびました。農家数は1839（天保10）年には62戸に増え、村人は助け合って農業に励み、豊かな村に変わっていったのです。



青木堰の設計図

報徳の教えと全国報徳サミット



第17回全国報徳サミット桜川市大会の様



小学生たちが青木堰完成までの劇を上演

尊徳は、物や人に備わる良い点や持ち味を「徳」とし、それを活かして社会に役立てていくことを「報徳」と名付けています。多くの人々を救ったこの教えを、まちづくりや人づくりにつなげていくために毎年開催されているのが「全国報徳サミット」です。尊徳にゆかりがある18市町村が集まって、報徳の教えについて学んでいます。桜川市では、平成23年に第17回大会が開催されました。

自治活動の支援や、市民参画による行政運営を推進し、地域の特性や市民ニーズを踏まえた多様な地域づくりに対応できるように、市民と行政が協働で地域を運営し、効率的な行政を推進する「自治」のまちを目指します。
また、情報を積極的に市民に提供し、健全で透明性の高い行政運営のために、行政改革に努めていきます。



「真壁のひなまつり」の期間中、多くの人が出て賑わう真壁地区。ハリエンジュも豊かなひな人形の数々はもちろん、歴史的な建造物が立ち並ぶ町並みそのものが大きな見所となっています。

1 1

ディスカバーまかべ

歴史的町並みを後世に伝えたい

会長 吾妻周一さん

真壁地区には現在も江戸時代の町割りが残り、隆盛を誇った明治・大正期の歴史的建造物を数多く見ることが出来ます。平成3年には、真壁の町並みをテーマにしたまちづくりの機運が高まってきました。また、当時は地域の歴史に関する資料は少なく、有志が独自に真壁の歴史を調べていきました。この時の資料は教育委員会の後押しを受けてまとめられ、歴史の副読本として市内の小中学校にも配付されています。

見世蔵や土蔵などの歴史的な建造物が残されている真壁地区。この町並みを保存し、後



Profile
昭和28年桜川市生まれ。吾妻歯科医院院長。平成5年、真壁地区の歴史的な町並みを保存することを目的とした「ディスカバーまかべ」を設立し、まちづくりに貢献してきました。

世に伝えていこうと「ディスカバーまかべ」が活動を始めたのが平成5年のことです。これまでに取り組んできたのは、同様のまちづくりをしている先進地の視察、「かわら版」や「イラストマップ」の作成、「案内看板」の設置、「町並みフォトコンテスト」「シンポジウム」、歴史的建造物での「コンサート」「落語会」の開催、旧郵便局活用についての行政への提言などです。「歴史的建造物を後世に伝えたい」という思いで、当初は活動については理



平成25年、新装された旧真壁郵便局でのコンサート

Column

【真壁のひなまつり】

歴史と人情が絡みあう一大イベント

城下町だった真壁地区には、古い街並みがたくさん残っています。町を囲む山並みとマッチした景観は、以前から密かな撮影スポットとなっていました。地元ボランティアの取り組みなどにより、町に訪れてくれる人が少しずつ増えてきました。ある地元の方は、冬の寒い日にカメラ片手に町を散策されている人を見かけるたびに「寒い中来てくれた人をもてなしたい。」と思ったそうです。

そこで「寒い中来てくれた人、何かおもてなしはできないだろうか？またこの町に来たいと思ってもらえるような良い案はないだろうか？」と町を良く知る知人に相談を持ちかけ、数人が集まりました。話し合いの中で「東北の方に行った帰り道、交差点の片隅に『おひなさまのふるさと、各家々にひな人形展示中』との看板を見たが、真壁の家々でもひな人形を道路から見ると飾ってお客様をお迎えすれば喜んでもらえるのではないか。」という提案があり実行することになりました。最初は5軒でも、10軒でも飾っていただけの家が、真壁のひなまつりと謳えるのではないかと



歴史的な建造物に飾られたひな人形

当初は「真壁の町中に町外の人が100人も来たら驚くよね。」といった具合でお客さんが来てくれるか半信半疑だったそうです。しかし、口コミで知名度も上がり、多くのマスコミにも取り上げられました。徐々に来客数も増え、「真壁にこんなに人が歩いているのを見たことがない」と地元の人もびっくりしたほどでした。人形を飾ってくれる家も日増しに増えて、まつりが終わる頃には40軒ほどになっていました。

今では展示軒数が160軒を超える、会期中10万余人以上が訪れる一大イベントとなりました。「もともと市民の自主的な活動から始まったイベントです。ひな飾りをしてくれる家々がいつまでも自由に光り輝く事が一番大切。」と、立ち上げに参加した有志は語ります。市民の協力とおもてなしの心で「真壁のひなまつり」は開催されているのです。



各家が工夫をこらした展示を行っています。



昭和2年に建てられた旧真壁郵便局は、真壁町の中心部に位置し、戦前・戦後を通してランドマークとして親しまれてきました。



平成11年、真壁における国の登録有形文化財第一号となった潮田家住宅。潮田家は江戸末期に兵隊や荒物、雑貨などの商いを始め、財をなしました。見世蔵などの建物は明治時代に造られました。

藤田哲会長が子どもの頃、実家はJR水戸線利用者の荷物を馬車で運送していました。やがて、兄弟で競走馬の育成をはじめますが、競走馬は故障すると大半が処分されるので、それが一番辛かったと藤田会長は言います。息子さんが馬術部に所属していた頃に乗馬クラブへと事業を転換。気性の荒いサラブレッドではなく、道産子と呼ばれる

4 馬とのふれあいが、心を豊かにする

株式会社大和ホースパーク

性格のおとなしい北海道和種馬を育てるようになりました。

道産子は、子どもたちと触れ合うのに最適な馬です。そこで、約30年前から幼稚園や障がい者施設に声をかけ、無料で乗馬体験などを行ってきました。本格的なホー



Profile 昭和18年桜川市生まれ。馬車運送業を営む家に生まれ、自身も馬に関わる仕事を選びました。競走馬の育成から始め、道産子の育成に移行。昭和51年、大和ホースパークを設立しました。



大和流馬競技大会

域の人が馬と触れ合う場を。大和ホースパークには、50頭の馬と小動物がいます。動物と触れ合うことは、ストレスの軽減や自信回復などにつながりますので、心と身体の健康にもお勧めです。

「真壁のひなまつり」での「チャグチャグ馬コ」嫁入り行列。たくさんの見物客が沿道に並びました。



工房開設10周年を記念して、真壁伝承館においてファッションショーを開催しました。

3 天然藍で本物のジャパンブルーを

真壁藍保存会

その昔、日本は藍の国と言われていました。天然藍には防虫効果があり、当時は多くの人が藍の染め物を身に着けていました。しかし、現在市販されている藍染め製品の大半が、石油系樹脂による人工藍の染め物です。20歳の頃に多田郷さんは「ふるさと塾」に参加し、初代会長の池田邦枝さんと出会い、そして天然藍による染色の

会長 多田郷さん

魅力にとりつかれ、多くの人に知ってほしいと、池田さんたちと藍染めの保存に取り組みようになつたそうです。

真壁藍保存会で行っている染色は「天然藍灰汁発酵建て」と言われ、スクモ（藍の葉を乾燥させたもの）に、木



Profile 昭和47年桜川市生まれ。20歳の頃「ふるさと塾」に参加し、真壁藍保存会初代会長の池田邦枝さんと出会いました。以後、天然藍染めの魅力にとりつかれ、藍染めの保存に取り組みできました。



染料に浸し染め重ねます。

験もできますので、多くの人に藍染めの良さを伝えていきたいと多田さんは語ってくれました。

灰の上澄、石灰、酒などを加えて発酵させ染料を作ります。次に布地に糊で絵柄を描き、染料の中に浸します。染料は土色ですが、布地が空気に触れて水洗いすると、鮮やかな藍色になります。色落ちが少ないのも天然藍の特徴。環境にもやさ

しい反面、天然藍は生きていますので毎日攪拌しなくてはなりません。また環境によっては、染まりにくくなることもあるそうです。

現在会員は約60人、天然藍を使った伝統的な染色ができることから県外から通ってくる方もいます。工房では藍染めの体



サクラサクリプロジェクトと地元有志による高峯の整備。高峯は山桜の群生地として注目されています。

とを知り、当時の商工会青年部の有志が立ち上がりました。最初に取り組んだのが、磯部桜川公園や櫻川磯部稲村神社の境内にある800本の山桜を調べて保護に取り組むことでした。歴史的な面で分かったのは、昔から「西の吉野、東の桜川」と言われ、紀貫之の歌や世阿弥の謡曲「桜川」の舞台にもなっていることです。また、江戸時代には將軍の命によって、隅田川堤や玉川上水堤などへ桜川の桜が数多く移植されている事実もあります。特に水戸藩では、徳川光圀公が借楽園の近くを流れる見川川のほとりに桜川の桜を移植し、その川を「桜川」と改名してしまうほどでした。明治時代になると「桜博士」として名高い植物学者の三好學博士（東京帝国大学教授）が調査に訪れ、学術的にも貴重な11種類を命名しています。この桜は、昭和49年に天然記念物に指定されました。さらに国が価値が高いと認める景勝地を指定する「名勝」も、茨城県において

「この活動をするまでは、こんなに素晴らしい地域資源が地元にあることは、よく理解していませんでした。長年桜を見守ってきた櫻川磯部稲村神社の宮司さんにも活動に参加していただき、いろいろ教えていただいています。このような活動を宮司さんにもとても喜んでいただいています。」と代表の渡辺雄司さん。以前は、花見客でも賑わっていたそうですが、花見客のマナーの悪さや、桜はソメイヨシノというイメージが定着するにつれて、桜川の桜人気は徐々にすたれていきました。「山桜が群生している高峯は、管理も行き届かなくなつて道も荒れていきましたが、サクラサクリプロジェクトと地元の方たちで道路や展望台を整備しました。今では、山桜の価値の分かる人



樹木医を招いての公園調査（平成18年）

「私たちは、桜川が日本に誇れる山桜の里だということを地域の人に知ってもらいたいです。そして、地元を誇りを持ってもらえるよう活動を続けていきたいですね。」と、渡辺さんは語ります。

アイデア商品を開発。神社や商工会が窓口になっていますが、海外からも問合せがあるそうです。飲食店でも、サクラにちなんだユニークな合格祈願メニューがそろっています。このような販売によって得られた収益の一部は、活動資金に充てられているそうです。そのほかに5年前からは、子どもたちに桜川の桜を知ってもらうために小学校の総合学習の講師を務めたり、地元の酒蔵と協力して山桜の花びらから酵母を抽出したりしました。

2 歴史に名を残す山桜の里で町おこし

サクラサクリプロジェクト

代表 渡辺雄司さん

商工会青年部が地域活性化のために、平成16年に立ち上げたのがサクラサクリプロジェクトです。きっかけは、平成12年に始めた花見イベント。このイベントがメディアなどで話題になるにつれて、地域にもっと素晴らしい桜はないかと調べていくうちに、地元では「磯部の桜」と呼ばれる山桜が歴史的にも非常に価値のあるものだというこ



Profile 昭和39年桜川市生まれ。平成5年頃から町おこし活動に関わっています。平成16年に商工会青年部の一員として「サクラサクリプロジェクト」を立ち上げました。

は借楽園（常磐公園）と桜川だけです。

「この活動をするまでは、こんなに素晴らしい地域資源が地元にあることは、よく理解していませんでした。長年桜を見守ってきた櫻川磯部稲村神社の宮司さんにも活動に参加していただき、いろいろ教えていただいています。このような活動を宮司さんにもとても喜んでいただいています。」と代表の渡辺雄司さん。以前は、花見客でも賑わっていたそうですが、花見客のマナーの悪さや、桜はソメイヨシノというイメージが定着するにつれて、桜川の桜人気は徐々にすたれていきました。「山桜が群生している高峯は、管理も行き届かなくなつて道も荒れていきましたが、サクラサクリプロジェクトと地元の方たちで道路や展望台を整備しました。今では、山桜の価値の分かる人

たちが全国から来てくれますので、花見と言ってもとても静かです。説明の必要な桜については、メンバーが交代で解説も行っています。見ごろの時期は、神社周辺が4月10日ごろ、高峯が4月20日ごろです。」と渡辺さんは話していました。このような活動が知られるようになり、平成23年には雑誌「家庭画報」が「桜川の花へ」という、27ページにわたる特集を組んでいます。



磯部宮司によるガイド風景

住み慣れた地域や家庭で、すべての市民が元気で健康に暮らすことのできる社会をつくるために、健康増進の施策を推進し、医療体制の充実並びに保健・医療・福祉の連携による福祉環境の充実に努めていきます。そして市民が互いに協力し合い、生涯にわたって健やかに暮らすことができる「安心」のまちづくりを目指します。



桜川市子育て支援センターで行われた手振り体験。こうしたイベントを通じて、親子双方にとって貴重な交流の場を提供しています。

TOPICS No. 1 子育て支援事業

核家族化や少子高齢化の進展により、地域のつながりや地縁・血縁による相互の助け合い、子育ての知恵・知識の伝承などが行われにくい時代になっていきました。そこで桜川市では、地域の中で子どもを安心して産み、子育てに大きな喜びを実感できる環境づくりを推進してまいりました。地域特性を活かしながら、「子どもたちを尊重し、幸せで健やかな成長」「子どもと保護者のための総合的な教育・子育て」「地域社会ぐるみで見守り応援する子育て」を基本とし、市民の多様な子育てニーズに対応した総合的な子育て支援を、市民・学校・企業・行政が連携し協働していきます。

桜川市子育て支援センター

桜川市では、0才～6才のお子さんと保護者の方の交流の場として、子育て支援センターを



真壁福祉センター内子育て支援センター

ど、解決の糸口となる機会ができるよう、信頼できるスタッフがお手伝いしています。

子育て(学童保育)クラブ

保護者や家族が仕事などで家庭にいない児童に、放課後を安全に過ごせる居場所を提供し、健全育成を図ることを目的とした施設です。小学1年生～3年生(放課後、保護者および家族が家庭にいない世帯に限る)を対象としています。



子育て(学童保育)クラブ

Column 【桜川市学校給食センター】徹底した衛生管理で、おいしい給食を

現代の「食」を取り巻く社会環境は大きく変化しています。子どもたちに「食」について考える習慣を身につけさせ、伝統的な食文化や食料の生産などを学ぶ食育も必要な時代です。このような点からも学校給食は、地域の特性に応じて成長期の子どもたちにとって重要な役割を担ってきました。

桜川市内には、小学校11校、中学校5校、幼稚園3園の教育施設があり、センター方式によ



煮炊き調理や炒め物調理を行う蒸気式回転釜

い方式を採用した学校給食調理場です。平成25年9月からは岩瀬地区に加えて大和地区と真壁地区の一部、小学校9校、中学校4校、幼稚園2園の約3,100人分の学校給食を調理・配送しています。

特筆すべきなのは、HACCP(危害分析重要管理点)方式の概念を取り入れ、作業区域の明確化を図ることで、作業工程の安全確保と食材の受け入れから配膳まで、徹底した衛生管理を行っていることです。

「桜川市学校給食センター」は、未来を担う子どもたちに、バランスのとれた安心安全でおいしい給食を提供しています。



桜川市学校給食センター外観

り給食を提供しています。合併以前も真壁・大和地区では昭和42年に筑るく地方学校給食組合学校給食センターを整備し、小・中学校、幼稚園(昭和52年より)に給食を提供してきました(平成4年に改築)。また、岩瀬地区でも北学校給食センターが昭和45年1月に共同調理場として開設されています。しかしそれぞれの施設も、老朽化に伴い時代に適した設備の改善が望まれています。

新たに完成した「桜川市学校給食センター」は、最新の厨房機器を導入し、最大3,500食の調理能力を有する完全ドラ



栄養士による学校給食指導の様子

安心 支え合うやすらぎの交響曲

諏訪防犯パトロール隊による、通学路の交差点での立哨ボランティア。雨の日も雪の日も欠かさず行われています。地元の方の地道な活動によって、子どもたちの毎日の安全は守られています。



岩瀬庁舎駐車場そばに設置された可搬型モニタリングポスト。地上1mの放射線量を検知します。毎週決まった時間に測定し、広報紙などにより市民の方へ測定値をお知らせしています。



この高齢者見守りネットワーク事業は、高齢者が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるように、地域の人々が日常の交流を通じて安否確認を行い、問題の早期発見と迅速で効果的な支援につなげるものです。平成24年10月、桜川市が52の事業所および警察・消防署などの関係機関と提携し発足しました。これは県内初となる試みです。

平成25年には、新たに17事業所と協定を締結しました。ネットワーク事業といっても、難しいことはありません。日常の挨拶をしたり、行事参加への声掛けをすることが主な活動です。普段の生活の中で、高齢者ご本人や家の様子を窺って、いつもと違うことがないか気にかけることが大きな効果を生むのです。



市長(写真右)から事業者への委任状の授与

市民からは、「今までは少しの異変に気づいても、警察に通報するのは大げさかな?」などと躊躇(ちゅうちゆ)してしまっていたが、これなら気楽に連絡できる。」との声があがっています。今までに寄



協定を結んだ事業者者に交付しているステッカー。事業所や見守りの車両などに貼られ、見守りネットワークの認知度向上に役立てられています。



平成25年12月、発足時の52の事業所に加え、新たに17事業所と協定を締結しました。

TOPICS No. 3 桜川市高齢者見守りネットワーク 地域の温かい目で高齢者を見守る



平成31年の国体においてライフル射撃の会場となる予定の桜川市では、チームライフル競技の普及に力を入れています。

桜川スマイルクラブは、市民が自由に楽しくスポーツと文化に親しみ、健康づくりとコミュニティづくりの機会をえられるようにするため、国の取り組みにより平成22年10月に設立された総合型地域スポーツクラブです。「いつでも・だれでも・楽しく」をモットーに、普段運動をしていない人や、スポーツを始めたいけれど方法が分からない人、友

達をつくりたい人などが気軽に参加できるクラブで、スポーツ振興くじ(50%)の助成金・会費などにより運営されています。クラブでは、バランスボール、健康体操、水中ウォーキング、ヨガ、リンパマッサージなど無理なく体力のつく運動から、テニス、バドミントンなどの競技、スポーツ吹矢、チームライフルといった特殊な用具を使用する



様々なイベントやスポーツ教室を開催

が前回の国体開催を契機に県営射撃場で練習に励み、国体の選手として活躍してきました。クラブでは、31年の国体選手を地元から輩出しようと、指導者の協力を得て選手の育成に取り組んでいます。

TOPICS No. 2 桜川スマイルクラブ 「いつでも・だれでも・楽しく」がモットー

桜川市に移住してきました。番組制作の仕事を経て空閑市で陶芸を学び、陶芸家に転身。現在も各地で個展を開くなど、陶芸家として活躍されています。一見無関係のように見えますが、出町さんは映画学校で学んだ映画作りと、アートコラボの企画を提案して実現する作業は同じだと言います。最初は平成14年に、真壁町の古いたたずまいに自分の陶芸作品を置いてもらい、その作品を巡って町内を散策するイベントを企画しました。それはあくまでもきっかけであり、地元の人に引き継いでもらえるようになれば成功だと考えていたそうです。そしてつと町や人、地域と何かできないかと思

いこの事業にかかわるようになりました。自身のネットワークを使い、造型や身体表現など多くのアーティストに協力してもらいましたが、中には先天的な表



真壁伝承館での「人間機械」ワークショップ(平成24年)

元気なアートプロジェクト実行委員会のけん引役として、当初から中心的な役割を担ってきたのが、アートディレクターで美術家の出町光識さん。今村昌平監督が設立した日本映画学校(現日本映画大学)の1期生で、原点は農村からという監督の教えから、実習で農村の暮らしに触れたことがきっかけで、24歳

の時に桜川市に移住してきました。番組制作の仕事を経て空閑市で陶芸を学び、陶芸家に転身。現在も各地で個展を開くなど、陶芸家として活躍されています。一見無関係のように見えますが、出町さんは映画学校で学んだ映画作りと、アートコラボの企画を提案して実現する作業は同じだと言います。最初は平成14年に、真壁町の古いたたずまいに自分の陶芸作品を置いてもらい、その作品を巡って町内を散策するイベントを企画しました。それはあくまでもきっかけであり、地元の人に引き継いでもらえるようになれば成功だと考えていたそうです。そしてつと町や人、地域と何かできないかと思

いこの事業にかかわるようになりました。自身のネットワークを使い、造型や身体表現など多くのアーティストに協力してもらいましたが、中には先天的な表

体)は、茨城県においてに開催される予定となっています。中でもライフル射撃競技は、昭和49年の国体に続いて桜川市内にある施設が会場となる予定です。当市では、多くの方

が前回の国体開催を契機に県営射撃場で練習に励み、国体の選手として活躍してきました。クラブでは、31年の国体選手を地元から輩出しようと、指導者の協力を得て選手の育成に取り組んでいます。

平成21年から平成23年は、市内福祉施設の障がい者とのアート「いつも静かに笑っている」「ねえ、なんで星を見上げるの?」「晴れどきどき、お散歩アート」ほくらが見つけたもの、平成24年には、市内の小中学生と作業所に通う障がい者とのアート「子ども×障がい者∞アートの冒険」、平成25年は、下妻市内の商店街活性化事業と協働し、市内の小中学校、高校、特別支援

学校、桜川市内の子育てクラブ、つくば市の読み聞かせグループとのアート「賢治礼賛 下妻栗山イハト・ヴォー・ほんとうのさいわいは一体何だろう?」(平成25年)を開催。アートプロジェクトの輪が、福祉から地域、まちづくりに広がりました。下妻市では、常総線の協力もあり「銀河鉄道の夜」をテーマに、駅前イルミネーションや商店会イベントを大いに盛り上げ、多くの方に楽しんでいただけたそうです。少しずつ活動は認知されてきましたが、まだ福祉的な意味合いで作品をとらえる方が多く、アートとしての認識、評価には至っていません。地域に定着し、価値を理解してもらえよう努めていきたいと出町さんは語っています。

学校、桜川市内の子育てクラブ、つくば市の読み聞かせグループとのアート「賢治礼賛 下妻栗山イハト・ヴォー・ほんとうのさいわいは一体何だろう?」(平成25年)を開催。アートプロジェクトの輪が、福祉から地域、まちづくりに広がりました。下妻市では、常総線の協力もあり「銀河鉄道の夜」をテーマに、駅前イルミネーションや商店会イベントを大いに盛り上げ、多くの方に楽しんでいただけたそうです。少しずつ活動は認知されてきましたが、まだ福祉的な意味合いで作品をとらえる方が多く、アートとしての認識、評価には至っていません。地域に定着し、価値を理解してもらえよう努めていきたいと出町さんは語っています。



JR常総線での「アートトレイン」ワークショップ(平成25年)

わがびと 5 元気なアートプロジェクト実行委員会 アートを通じて表現の楽しさを知ってほしい

平成20年に茨城県で開催された国民文化祭をきっかけに、障がい者や子どもたちにアートの交流を通じて、表現の楽しさやアートのおもしろさを感じてもらおうと、市民主体の「元気なアートプロジェクト実行委員会」が作られました。具体的には、市内の障がい者施設にアーティストが直接出向いて、年5回程度のワークショップを

開催。美術館などで展示することを前提に、アーティストと障がい者で作品を作っています。この活動の原点は、人それぞれが持つ表現の方法や違いを認め合うこと、つまりアートなのです。この活動に取り組んだことで一番喜んでくれたのは、障がい者の親御さんや家族でした。例えば、単純にチラシを丸めているような作品であっても、アーティストが見れば「それが表現力」として認めてもらえます。親御さんもその行為の価値を認識できるようになりました。作品という結果を作る以上に、作る過程がこのワークショップで大事にしてきたことです。



Profile 昭和43年東京都生まれ。美術家/アートディレクター。日本映画学校の1期生として今村昌平監督に師事。番組制作の仕事を経て空閑市で陶芸を学び、陶芸家に転身。真壁町瑞世地区在住

現力や独自の感性を持つ障がい者とのギャップが大きすぎ、出来ないかと断ってきたアーティストもいたそうです。ワークショップの成果は「元気なアートコラボラボ 桜川芸術祭」として、県陶芸美術館やつくば美術館で展覧会を開催してきました。

学校、桜川市内の子育てクラブ、つくば市の読み聞かせグループとのアート「賢治礼賛 下妻栗山イハト・ヴォー・ほんとうのさいわいは一体何だろう?」(平成25年)を開催。アートプロジェクトの輪が、福祉から地域、まちづくりに広がりました。下妻市では、常総線の協力もあり「銀河鉄道の夜」をテーマに、駅前イルミネーションや商店会イベントを大いに盛り上げ、多くの方に楽しんでいただけたそうです。少しずつ活動は認知されてきましたが、まだ福祉的な意味合いで作品をとらえる方が多く、アートとしての認識、評価には至っていません。地域に定着し、価値を理解してもらえよう努めていきたいと出町さんは語っています。

地域が一体となり、次代を担う子どもたちの「生きる力」を育み、特色ある教育の充実に努めます。市民の多様な学習・創作活動を支援し、子どもからお年寄りまで、だれもが学べるよう、生涯学習環境を整備します。地域づくりを担うあらゆる世代の人々が、健やかな体と豊かな心を「育成」するまちづくりを目指します。



中庭に面した壁面に、不規則に設置されたたくさんの窓や穴がともユニーク。それらに明かりが灯って輝く、日暮れ時の風情は必見です。

TOPICS No.4 真壁三伝承館 歴史を伝える市民の交流拠点

多目的複合施設として、平成23年9月に開館したのが「真壁伝承館」です。旧真壁中央公民館の老朽化に伴い建設されました。歴史的建造物が立ち並ぶ地域の景観に配慮した外観は、地域の新たなシンボルとして親しまれています。「私たちは実際にまちの伝統的な建物をサンプリングして実測するところから設計を始めました。伝承館の外形は、真壁の複数の建物の外形の組み合わせで出来ています。」と、設計者である渡辺真理さんは語っています。とはいえ、この建物は歴史的な建物の単なる模造品ではありません。21世紀ならではの先進的な材料や構法が用いられているのです。



既存の歴史的な町並みに調和するよう配慮された外観

また、真壁伝承館はかつて真壁陣屋のあった場所にあり、建設に先立つ調査では陣屋を囲んでいた池や堀の跡が発見されました。多数の遺物も出土し、当時の様相を知る成果を上げています。こうしたことから、文化庁と協議し遺跡の保護に配慮した工法などを採用。館内にある歴史資料館では、出土物を展示するとともに、真壁伝承館の敷地全体で遺跡の遺構表示を行う工夫をしています。

人収容のまかべホール、蔵書数2万冊の真壁図書館、音楽スタジオ、会議室、創作室などがあり、さらに真壁中央公園も併設されていて開館以来多くの市民が利用してきました。市民の交流スペースとしての役割を担う真壁伝承館は、優れた設計思想からこれまでに建築やデザインの賞を8つ受賞しています。2012日本建築学会賞作品賞、平成24年日本建築士会連合会賞優秀賞、2012グッドデザイン賞、平成25年度まちづくり功労者国土交通大臣表彰、平成25年第54回BCS賞などです。特に2012日本建築学会賞作品賞は、昭和18年に創設された国内で最も権威のある建築・建設分野の賞で、「極めて質の高い建築空間の創造に成功している。」と、地域の建物や景観を調査し市民とともに設計に組み込む手法が評価されました。

これからも、さまざまな市民活動の拠点として期待される真壁伝承館は、多くの人々に親しまれていくことでしょう。

Column 人形浄瑠璃 真壁白井座

江戸期に人気を博した白井座を復活

三味線の伴奏と独特な節回しで語る浄瑠璃に、人形芝居が合体したものが人形浄瑠璃です。江戸時代の初期に誕生し、一時期は歌舞伎の人気をしのぐほどでした。江戸後期には、旧白井村（現在の桜川市真壁町白井）でも、若者たちが白井座（白居座または白栄座ともいう）という人形浄瑠璃をはじめ、祭礼などで上演するようになりまし。1810（文化7）年に、笠間藩の藩政改革によって上演が差し止められたこともありますが、村人たちが上演の要望書を出すほど人気が高くなり、1820（文政3）年に弁天祭での上演が許されました。その後も近所で興業は続けられてきましたが、徐々に衰退し1920（大正9）年の権穂小学校の新築記念上演が最後となりました。文化庁から平成13年に文化事業に関する助成があった際に、有志による「人形浄瑠璃真壁白井座準備会」が発足。翌平成14年には座員の募集が行われ、約30人の方が集まってきたそうです。そして平成15年に「真壁白井座」が結成され、80年ぶりに人形浄瑠璃が復活することになりました。



「第5回伝統民俗芸能のつどい」での公演

19世紀には県内のほかの地域でも人形浄瑠璃は行われていたが、現在復活・活動しているのは真壁白井座だけです。人形浄瑠璃は、人形（1体につき3人）、三味線、義太夫（語り）という組合せで上演します。人形浄瑠璃を上演する保存会はたくさんありますが、真壁白井座のようにすべての担当を養成して演じているところは珍しいです。よと座長の青木秀史さん。三味線や義太夫だけはプロにお願いしているところも多いそうです。青木さんは知人に文案の関係者がいたことから人形浄瑠璃については以前から知っていたそうです。座員



「真壁白井座 第7回定期公演」の様



桜川市の歴史に触れることができる資料館。真壁の町並みとそのルートである真壁城。そしてこの地にあった真壁陣屋を中心とした歴史の紹介（常設展示）のほか、企画展示も随時開設しています。

真壁伝承館に併設されている図書館。白を基調とした明るくモダンな空間で、一般書籍・絵本・児童書のほか、希少な郷土資料も充実しています。どなたでも気軽に利用することができます。



加波山囃子は地域のお祭りに欠かせない存在

加波山囃子は地域のお祭りに欠かせない存在。保存会の創設者で前会長の津下昇さん（中央）は、このままでは地元の大切な文化が消えてしまうという強い危機感を抱き、演奏するための和太鼓の調達や、地域の有力者への財政的な支援要請、演奏経験者への保存会加入の説得に奔走しました。その甲斐あって昭和55年に、加波山囃子保存会を20人で結成。加波山囃子を復活させることができました。その後、当時の村長から依頼

その後、当時の村長から依頼を受けて、「文化芸術祭」や、全国の「大和」と名がつく市町村で構成される「大和サミット」などに出演。徐々に全国規模で加波山囃子保存会の名が知られるようになっていきました。それらの業績により、昭和57年に「心を合わせて豊かな郷土づくりに積極的な努力をした」として茨城県知事より「ぼら賞」を受賞。昭和60年には茨城県より旧大和村を通して要請を受け、「つくば万博」いばらきパビリオンのお祭り広場に出演することもできました。

平成14年には「加波山囃子保存会子供連」を発足。子どもたちにも親しみやすい会にしようと、伝承されている古典の楽曲に加え、外部から講師を招いて、「韋駄天」「大和」「紅空」「はなび Hana-bi」といった新作のお囃子も積極的に取り入れていきました。今では子供連の会員数

は30人余りにまで増え、すっかり地域に定着しています。地元地区のお祭りはもちろん、農協祭、市民文化祭、子供芸術祭など、市内外の数多くのイベントに出演しています。「子供連は小学生が中心ですが、中学・高校生になっても来てくれる子どもたちがいるのが嬉しいですね。大人になってもお囃子を続けて、次の世代に伝えていってほしいと思います。形だけの伝統というのでは、いつか廃れてしまいます。若い世代が参加して、生きた文化として観客に感動を与えていくことが大切なんです。それが結果的に子どもたちの健全育成、地域の活性化にもつながっていくと思います。」と津下さんは言います。



真壁伝承館で開催された「第5回伝統民俗芸能のつどい」のステージで腕前を披露する子どもたち

7 加波山囃子保存会 受け継がれる伝統文化

会長 津下昇さん



Profile 昭和25年桜川市生まれ。津下電気工事店経営。平成23年に、創設者の笠倉義貞さんの後を継いで加波山囃子保存会の3代目会長に就任し、努力的に活動しています。



子どもたちから寄せ書きを贈られた笠倉さん(中央)

これまでの功績が認められ、平成24年に「地域伝統文化功労者表彰」を受賞しました。それを祝って子どもたちから寄せ書きが贈られた際、笠倉さんはこう答えました。「集落のみんなが協力してくれるから続けられる。これは本当は私でなく、君たちがもらうべき賞だ。」と。今日も大曾根地区に和太鼓と子どもたちの元気な笑い声が響きます。笠倉さんの結成した保存会は、お囃子の音色だけでなく、世代間のつながりや郷土を愛する心も受け継いでいくことでしょう。

6 ユーモアと人情にあふれる市民劇団

座長 天賀谷正さん



県内各地で上演している防犯寸劇。悪質商法や振り込め詐欺の手口を分かりやすく伝えていきます。

長年勤めていた会社を定年退職し、時間に余裕のできた平成19年の12月、友人との会話の中から「劇団どてかぼちゃ」は誕生しました。合併後の市民の連帯感と、中高年の生き甲斐を作ることが主な目的でした。下手でも許してもらえるのではということで、「どてかぼちゃ」と命名。電気の技術者だった天賀谷正さんは、本格的に芝居をした

経験はありませんでしたが、会社で老人ホームに慰問に行った際には、まとめ役を務めていたそうです。高校生の頃は文章を書くのが好きで、物語を書くことにも興味があったと天賀谷さん。定年後に時代劇映画を作ろうとして、「人情桜宿」という脚本を書いたそうです。その時は、予算の関係で映画作成は断念。しかし、少部数だけ印刷して配っていたシナリオが、ある病院関係者の目にとまり、講演会の時に上演してもらえないかという依頼が舞い込んできました。あわてて人集めをして、40〜50分の劇に再構成。こんな調子で素人同然の人間が演じたわけですから、上手くできなくても仕方なかったのですが、ユーモアと人情にあふれた物語が好評だったこともあり、劇団存続につながっていったそうです。このときに評判が悪かったら、おそらく劇団はなくなっていたでしょうねと天賀谷さんは当時を振り返ります。劇団どてかぼちゃの演目はす



Profile 昭和16年桜川市生まれ。定年退職後、平成19年に時代劇を専門の「劇団どてかぼちゃ」を設立。県内外で年に10回ほど防犯寸劇を上演するほか、様々なイベントで舞台に立っています。

べてが時代劇です。初舞台の後も数作を上演し好評でしたが、同時に、このままでは高齢者向けの劇団になってしまうという危機感もありました。より広く社会の役に立つ劇団になるにはどうすればよいのかを考えた天賀谷さんは、試行錯誤の末に、時事性のある事件を時代劇風にアレンジするという、現在の作風を生み出したのです。

最近防犯関係団体などの依頼により、県内各地で悪質商法や振り込め詐欺などの被害防止を目的にした、時代劇風の防犯寸劇を上演しています。脚本はすべて天賀谷さんのオリジナルで、これまでに書いたものは10作品。現在も2本同時に書いているそうです。防犯寸劇を書くようになったきっかけは「大好きいばらき県民会議」からの依頼で、5年ほど前に水戸市の常陽藝文センターで上演したこと



「報徳サミット」で二宮尊徳の物語を上演

に始まります。その後も、県の防犯シナリオのコンペで、連続して採用されました。この関係で年に10回は県内各地に防犯寸劇の上演に出かけていくので、ほかの依頼が受けられないのが悩みどころか。現在の団員数は25人で、年齢は50歳代から70歳代。脚本と演出を担当する天賀谷さん以外は、役者とスタッフを兼務することも多いそうです。岩瀬中央公民館が稽古場で、大道具は基本的に自分たちの手作り。上演中のセリフや音響効果はすべて事前に録音しておき、上演時の役者や裏方の負担を軽減するようになっています。このような時に使う機材や道具も劇団にはありませんので、団員が仕事や趣味で使っているものを借りています。



様々な職業の市民が参加しています。

「一番苦労するのは人の問題ですね。」と、天賀谷さんは言います。「事情はいろいろあると思いますが、役者に突然退団されてしまうと、代わりは急には見つかりません。かといって、団員数を増やしても、仕事や役の回つてこない人だけが増えてしまいます。適正な人数を維持していくことが必要なんです。」一方、劇団をやっている嬉しいのは、観客の方の拍手とこの「温かい拍手は、何よりのご褒美です。こうして皆さんに評価してもらえようになつてきた劇団を、自分たちの後も続けられるようにしたいですね。そして、いつか地元の偉人をモデルにした時代劇を上演したいと思っています。」と、天賀谷さんは熱く語ってくれました。

もくぞう こうぞう ぼさつ ざう
木造虚空蔵菩薩坐像
 【県指定文化財 彫刻】

指定年月日 平成元年1月25日
 所在地 桜川市真壁町田913
 管理者 山口地区
 制作時期 平安時代後期

猿住山真福寺伝来の仏像。麻布の堂内に安置される本像は、像高96.5cmの尊身大座像で、椀材の一本で造られています。像容全体に平安時代後期特有の温雅な作風がみられ、三重円光ともども奥内における平安時代彫刻の佳作です。



県指定文化財

やくおういんさんじゅうのとう
薬王院三重塔
 【県指定文化財 建造物】

指定年月日 昭和30年6月25日
 所在地 桜川市真壁町惟尾3178
 管理者 薬王院
 制作時期 1704(宝永元)年

惟尾山薬王院は標高200mの惟尾山中にあり、782(延暦元)年、最上人による開山と伝える古刹。三重塔は桜井瀬左衛門による原儀な姿で、塔高25m、惟尾山のシンボルとなっています。塔の全面に施された彫刻は初重蓮子窓部に鳥羽面鏡作と伝える十六重環の彫刻をはじめ、尾垂木の丸彫籠など、江戸時代特有の装飾建築様式を示しています。



せきぞうしやうこうじ た ほうとう
石造祥光寺多宝塔
 【県指定文化財 建造物】

指定年月日 昭和35年3月28日
 所在地 桜川市本木78
 管理者 祥光寺
 制作時期 1202(建仁2)年

凝灰岩製。全国で在銘最古の石造多宝塔です。



しほんちやくしよくでんまかべどう む ぞう
紙本着色伝真壁道無像
 【県指定文化財 絵画】

指定年月日 平成11年11月25日
 所在地 桜川市真壁町真壁198
 管理者 桜川市
 制作時期 戦国時代末期

領主真壁家に伝来した資料のうち、戦国時代の当主真壁久幹(道無)を描いたものと推定されています。物語性を強く表した像容や地方色豊かな技法は、近在の小田氏の肖像画と共通のもので、



まかべしるいだいぼちおよ ぼひぐん
真壁氏累代墓地及び墓碑群
 【県指定文化財 史跡】

指定年月日 昭和46年12月2日
 所在地 桜川市真壁町山尾525-1
 管理者 桜川市
 制作時期 中世

真壁氏の氏寺と伝える遍照院正徳寺の境内には、40基の五輪塔群があります。銘文などは読みとれませんが、真壁氏の墓碑群と推定されています。



もくぞうしんのうりゅうぞう
木造四天王立像 ほか7軀
 【県指定文化財 彫刻】

指定年月日 平成21年11月19日
 所在地 桜川市本郷13
 管理者 妙法寺
 制作時期 平安時代末期

中心部をケヤキの一本造、背割りの技法を使った仏像で、古代の仏像特有の美しい造型をもちます。9世紀に焼失した新治廃寺を引き継ぐ役割を持った仏像と推測され、大きな価値があります。



まかべながおか こう だもんじよ
真壁長岡古字田文書
 【県指定文化財 古文書】

指定年月日 平成11年11月25日
 所在地 桜川市真壁町真壁198
 管理者 桜川市

真壁家の家子として活躍した長岡家の、南北朝時代を中心とした35点の古文書。合戦の様子や所領をめぐる武士や一族内部の争いなどが具体的に分かる貴重な資料群です。



もくぞう くだいりき ぼさつ ざう
木造五大菩薩像 5軀
 【県指定文化財 彫刻】

指定年月日 平成25年1月24日
 所在地 桜川市池亀394
 管理者 吉祥院
 制作時期 平安時代末期

五大菩薩像の彫刻として、平安時代に制作された5軀がすべて揃って現存するものは、全国的にみて本像が唯一と考えられ、仏教史や仏教美術史上、非常に貴重なものです。五大菩薩は、奈良仏教の鎮護国家の思想と関係が深く、仏教を敬う国王に対して使われ強大な力でその国を護るとされています。全国的にみて希少な尊像です。怒顔調伏を備って造像されることがあり、地元では平将門の伝説と結びついて、将門を調伏するために造像されたと伝えられています。現在は月山寺美術館で展示されています。

国指定文化財

おやまじ さんじゅうのとう
小山寺三重塔 【国指定文化財 建造物】

指定年月日 明治39年4月14日
 所在地 桜川市富谷2190
 管理者 小山寺
 制作時期 1465(貞正6)年

小山寺は735(天平7)年、聖武天皇(しょうむてんのう)の勅願により、行基を開基として創立されたと伝えられています。この三重塔は相輪の銘によると、1465(貞正6)年、多賀谷朝経が穴旦那となり、大工宗阿弥家吉とその息子によって建立されたものです。その塔の様式はほほ和様からなり、細部に禅宗様を混じえています。関東以北で室町時代にさかのぼる塔は、この塔と栃木県益子町の西明寺三重塔の2基だけです。



もくぞうかん ぜ おん ぼ さつりゅうぞう (つきたりぜんりゅうそん)
木造観世音菩薩立像 (附前立尊)
 【国指定文化財 彫刻】

指定年月日 明治44年8月9日
 所在地 桜川市本木1
 管理者 楽法寺
 制作時期 本尊 平安時代(9世紀後半～末ごろ) 前立尊 鎌倉時代後半

本尊は八臂の観音菩薩立像で、針葉樹材を用いた一本造りの像です。その簡古な構造に加えて翻波をまじえた衣褶のしきたった彫法は、いわゆる平安初期一本彫像の風にならうものですが、肉取りや衣文の彫り口は、時代特有の力強さとは異なっています。また、天衣や裳の縁にうねうねとした翻りや立ち上がりなど、一種の地方作風ともいえる特徴があります。寺伝では本像を延命観音と伝えますが、空講観音とみる説もあります。

SAKURAGAWA HERITAGE

桜川遺産

まかべじょうあと
真壁城跡 【国指定史跡】

指定年月日 平成6年10月28日
 所在地 桜川市真壁町古城・山尾
 管理者 桜川市
 制作時期 平安時代末期

中世この地域を治めた真壁氏の居城。筑波山系から西へ伸びる尾根上の微高地を利用して造られた平城形式の城跡で、国指定面積は12.5ヘクタールに及んでいます。本丸を中心に巡らした四重の堀と土塁、土壇などが良好な状態で残され、中世城郭の構造を知る上で貴重な城跡です。現在発掘調査と史跡公園整備事業が進められています。



桜川(サクラ) 【国指定名勝】

指定年月日 大正13年12月9日
 所在地 桜川市磯部135ほか
 管理者 桜川市

磯部稲村神社の参道をはさんで、両側約1kmに及んで桜の並木があります。古来磯部の百舌桜として桜の名勝となり、その名前は吉野に次ぐものでした。東北産の品種シロヤマザクラを中心として、花の色、香りなどに富み、学術的に貴重な存在です。

桜川のサクラ 【国指定天然記念物】

指定年月日 昭和49年7月16日
 所在地 桜川市磯部135ほか
 管理者 桜川市

磯部稲村神社参道の両側約1kmのほか、市有地5,514.05㎡内の桜、シロヤマザクラの群

あじろおい
網代笈 【国指定文化財 工芸品】

指定年月日 昭和32年2月19日
 所在地 桜川市西小嶋1677
 管理者 月山寺
 制作時期 室町時代

箱型に三脚をつけた笈で、正面を三段に区切り、各段に銅製メッキの扉扉による観音開きの扉を設け、中央に一本の帖木を嵌めています。枠木や帖木は桐材に黒漆を施しています。扉には粗い布を貼り朱漆を塗り、そのうえに花形をかたどった皮製の文様を貼り黒漆を施しています。上段および下段に金駒菊座楕円形紐通し金物をつけ、左右には鉄製提綱をつけています。帖木の裏に、武蔵坊弁慶の墨書名がかすかに残っていますが、様式、技法からみて年代は下るものです。



うえのはらかわらかまあと
上野原瓦窯跡 【国指定史跡】

指定年月日 昭和17年7月21日
 所在地 桜川市上野原地新田312-3
 管理者 桜川市
 制作時期 奈良時代～平安時代

この瓦窯跡は新治廃寺の瓦を焼いた窯と推測されるもので、新治廃寺の東方約1km、上野原の地にあります。遺構は地中に保存されており、現在は草地・雑木林となっています。

時を超えて受け継がれる豊かな文化の礎



災害や犯罪に強く、安全で利便性の高い都市基盤の整備に努め、地域の特徴を生かした美しい景観づくりと、後世に豊かな自然を引き継いでいけるよう自然環境の保全、環境負荷の少ない循環型社会の構築を図ります。
豊かな自然環境と歴史・文化を守りつつ、暮らしやすい生活環境が整った「調和」するまちづくりを目指します。



新春の恒例行事である桜川市消防団出初式終了後に行われた、「くし湖」の放水の様子。式典には関係者約550人が参加し、皆川消防団長を筆頭に地域の安全と防災への決意を新たにしました。

8 桜川市消防団

地域の安全に貢献する消防団

団長 皆川 光吉 さん

桜川市消防団は、旧3町村それぞれが平成17年に統合して設立されました。現在は、女性消防分団1分団（平成21年結成）を含む37分団で構成され、団員数は565人（平成26年1月1日現在）です。男性消防分団（岩瀬地区17分団、真壁地区12分団、大和地区7分団）にはポンプ車が配備され、地域の実情に応じ迅速に消火活動ができる体制をとっています。女性消防分団は、救急救命講習会の実施ならびに防災訓練時の訓練協力などを目的として活動しています。

消防団に求められる役割は、火災や災害時における対応だけでなく、行方不明者の捜索など多岐にわたっています。団員はプロではありませんが、各地域から選出されているため水源や地理に詳しく消防署



Profile
昭和27年桜川市生まれ。株式会社ミナカワ代表取締役。昭和53年に旧大和村消防団に入団。平成21年から桜川市消防団の団長に就任。町村合併後の組織づくりに尽力してきました。

との連携により、地域の安全確保に大きく貢献してきました。また、平成23年3月11日に発生した東日本大震災でも、発生直後から3日間にわたり、生活用水供給などの支援活動、広報などで重要な役割を果たしています。皆川光吉団長は36年前に入団し、5年前に桜川市消防団の団長に就任、当初は旧町村ごとに消防団の組織運営が異なっていたことから、それらを統一するとともに近代的な組織作りに取り組みされてきました。その中でも最も苦勞しているのは団員の確



茨城県消防ポンプ操法大会県西地区大会で鍛え上げた技を披露

Column

【東日本大震災復旧作業】

未曾有の経験を未来に活かす

最初は弱い横揺れが起き、突然立っていられないような強い揺れに変わったことを覚えている方も多いのではないのでしょうか。平成23年3月11日（金）午後2時46分頃に、宮城県三陸沖を震源とする「東日本大震災」が発生しました。誰もが経験したことのない、観測史上最大規模の巨大地震（マグニチュード9.0）です。多くの人命が奪われ、壊滅状態となった自治体もあります。

その後に起きた東京電力（株）福島第一原子力発電所の事故により各地の原発が運転を停止し、首都圏では計画停電が実施され、



ボランティアによる焼き出し

日常生活に大きな影響がでたことは記憶にも新しいところです。桜川市でも、震度6弱を観測。6人の軽傷者が出ていますが、幸いにも死亡者や重傷者はいませんでした。東日本大震災は、市内各所で屋根瓦・壁・塀などの崩落や道路の亀裂・陥没の発生、電気・水道などのライフラインの寸断、製油所の相次ぐ操業停止による深刻なガソリン不足に陥りました。また、国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された真壁地区の町並みにも、倒壊を含む甚大な被害をもたらした傷跡を残しています。



真壁の伝統的建造物も甚大な被害を受けました。

桜川市では、地震発生時に市議会が岩瀬庁舎で開催されていたことから、庁舎玄関前に、急遽、災害対策本部を設置し、被害状況の把握と応急対応にあたりました。通信手段にも被害がおよんでいたために、飲料水・食料品などの生活必需品の確保と避難所の開設および広報活動を優先的に進めました。また、自衛隊・桜川警察署・筑西広域消防本部やボランティアの方々の協力を得ながら、高齢者一人世帯への安否確認・生活支援物資の配付や避難者の皆様への支援など、生活救済活動を行うとともに、崩落した屋根瓦や塀などの災害廃棄物の受け入れや道路などの復旧活動に取り組み、応援協定を結んでいる東京都墨田区からは支援物資も届けられました。

東日本大震災がもたらした被害を教訓に、災害時の応急復旧対応と防災行政無線のデジタル化更新工事や大型備蓄倉庫の建設など、防災基盤整備を計画的に進めています。平成25年4月には、神奈川県海老名市・本県那珂市とともに3市間で「災害時における相互応援に関する協定」を結び、お互いについての理解を深め災害時に限らず、さらなる市民相互や地域間の交流を深め、市民の安心・安全のくらしにつなげていきます。



桜川警察署では、地元のボランティアと協力して、小学生を対象とした「駆け込み・通報訓練」を実施。不審者に声をかけられた際に近くの「110番の家」へと駆け込むことを実地で教えています。



桜川警察署による小学生を対象とした交通安全教室の様子。交通ルールを守ることの大切さを伝え、低学年には安全な歩行の仕方を、中・高学年には安全な自転車の乗り方を教えています。

電波の過密状態を解消するための電波法の改正や施設の老朽化に伴い、桜川市では、防災行政無線の運用を3波によるアナログ方式から、1波で市内全域をカバーするデジタル方式へと統合再整備しました。

中継局は設置せず、再送信子局（岩瀬庁舎のみ）を設置して通信エリアを確保しました。親局は、災害対策本部が設置される大和庁舎に置き、桜川消防署および岩瀬・真壁庁舎からも放送ができるよう遠隔制御装置を



大和庁舎に設置された親局設備

防災行政無線

TOPICS No.5 災害対策
災害に備えた安心安全のまちづくり



拡声子局の増設アンテナ

設置。また、先の大震災時に避難所を開設した施設に連絡通話装置（無線電話）を設置しました。戸別受信機はアナログ方式・デジタル方式を併用します。

デジタル化・戸別受信機設置のメリットとして、運用の効率化、遠隔制御装置による遠隔操作、連絡通話装置の設置による公衆回線断線時の無線電話連絡、災害情報や行政情報の確実な各家庭への伝達、国が整備しているJアラート（全国瞬時警報システム）との連動などが挙げられます。

事業費を軽減するため、拡声子局に増設アンテナを設置し、なるべく子局本数を増やさずに通報エリアを確保できる設計としたのが特徴です。



建設中の大型備蓄倉庫

大型備蓄倉庫

桜川市では、従来、岩瀬・大和・真壁の3庁舎ごとに災害時に備えた非常用の食料などを備蓄してきました。東日本大震災での経験を経て、当市は、それらの機能の効率化の必要性を認識し、運用の一元化を計画しました。そして平成25年度事業で、大型備蓄倉庫を岩瀬庁舎の敷地内に建設・整備し、災害などの非常時において、物資を迅速かつ効果的に供給するとともに、援助物資の受入れを一括して管理できる防災体制を構築しました。

建築面積は199.79㎡、高さ6.4m。鉄鋼造で、カラー亜鉛鉄板丸折葺きの屋根を備え、外壁には金属サイディング張りを採用しています。内部にはパレットトラック3段が14台格納されており、常時、保存水やアルファ米・缶パンといった保存用食糧を貯蔵し、そのほかに避難所用の生活必需品、応急対策用の発電機や土嚢・スコップなどを備蓄しています。

今後、非常時に備え、日々、備蓄品の管理・改善をはかっていきます。



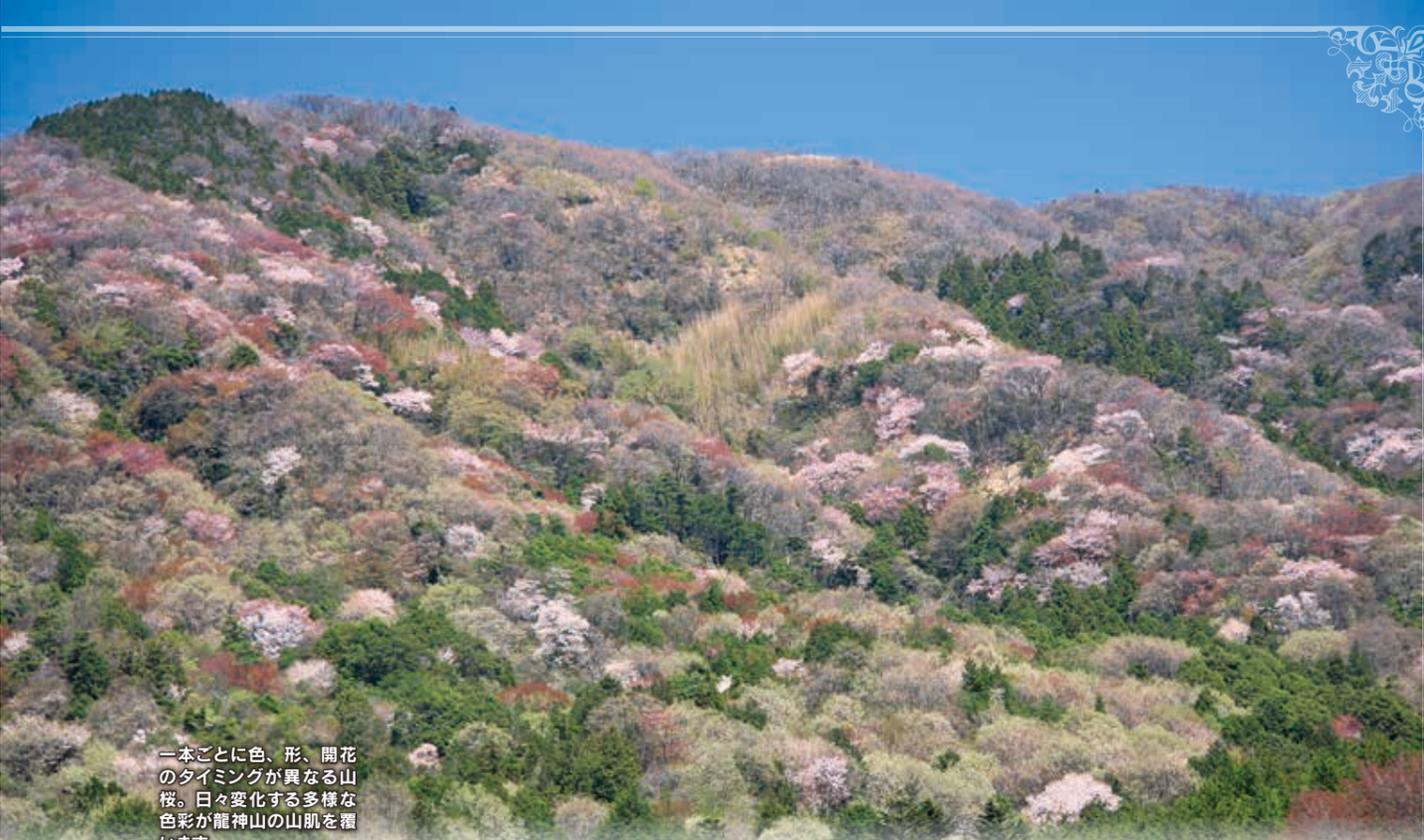
桜川市役所大和庁舎屋上に設置された太陽光パネル

太陽光発電設備

桜川市では、大和庁舎および岩瀬・真壁福祉センターで、災害用太陽光発電設備を導入しています。これは、桜川市地域防災計画に基づき、災害対策本部・避難所などの防災拠点に、太陽光を活用した自立分散型エネルギー設備を設置することで、防災機能の強化を図っていくためのものです。

災害対策本部では、活動をするうえで非常用電源設備用（照明・テレビ・通信機器・パソコン）に最低限の電力を確保しなくてはなりません。災害などで

停電になった場合は、太陽光発電または蓄電池から電力を供給する方法へ自動で切り替えを行い、電力を供給します。蓄電池は平常時に太陽光発電設備で発電した電力を充電しておき、停電が長期化した場合は夜間電力として使用します。平常時は、太陽光発電設備で発電した電力を、導入した施設で消費することで、電力使用量の削減を図ります。また、蓄電池の電力は、使用電力のピーク時間帯に出力することで、最大使用電力の削減に役立ちます。



一本ごとに色、形、開花のタイミングが異なる山桜。日々変化する多様な色彩が龍神山の山肌を覆います。

9 龍神山の山桜を愛する会

龍神山で山桜の素晴らしさを知ってほしい

会長 菊地保さん

桜川では磯部の桜が有名ですが、のどかな里山の春を彩る高峯（標高520㍎）の山桜もたいへん見ごたえがあります。桜川は明治の中期からみかげ石の採掘など石材業で栄えた地域であり、水はけのよい花崗岩質の土壌が山桜が育つのに適しているため、珍しい交配種が増えたと考えられています。そのため、色とりどりの山桜が群生するこの景観が生まれたのです。

この高峯は、地元平沢地区では龍神山と呼ばれ親しまれてきました。かつては桜の名所として賑わいをみせた龍神山でしたが、「桜といえばソメイヨシノ」という時代が続いたこともあって、一時期は地元の人たちの間でも顧みられることが少なくなってしまうていきました。山は荒れ、山桜はほかの木々に埋もれつつあったのです。

それを見かねた地元の方が清掃活動をしているのを知った菊地保さんは、忘れかけてい



Profile
昭和27年桜川市生まれ。定年退職後農業を営んでいます。平成24年に「龍神山の山桜を愛する会」を結成。ボランティアとして高峯（龍神山）林道の整備に取り組んでいます。

た故郷の自然の価値を再認識したといえます。自分たちも何か協力できないかと思い立った菊地さんは、平成24年に「龍神山の山桜を愛する会」を結成しました。そうして市民の手できれいに整備されるようになった龍神山には、桜や紅葉の季節になると多くの行楽客が訪れるようになりました。

「愛する会」の主な活動は、山桜自生地の下草を刈ることや、林道やU字溝の清掃で、年3回ほど行っているそうです。「シーズン以外は人通りも少なく、風雨で側溝や路面に木の葉・土砂などが堆積してしまいがちですが、山桜の保護のためにも、年間を通じて環境を整備すること



高峯の美しい林道は、地元有志の努力の賜物

が大切なんです。」と菊地さん。手作業での清掃活動は時間も労力も必要ですが、会員の中には小型の建設機械を持っている方もいるので助かっているとのこと。ただし、燃料費などは個人負担です。この美しい林道は地元の方の奉仕の精神によって支えられていることを忘れられないようにしたいものです。

林道は桜の季節（4月上旬～下旬頃）には通行止めになり、車の通らない静かな環境でゆっくりと散策することが出来ます。「麓から桜色に染まる龍神山を眺めるだけでも十分楽しむことができますが、ぜひ林道を登っていただいて、心地よい汗とともに山頂からの美しい景観を堪能していただきたいですね。」と菊地さんは語ってくれました。

地域の特性を活かした農業、商工業、観光などの産業が、社会や経済環境の変化に柔軟に対応し、高い競争力が発揮できる施策を展開していきます。また、北関東自動車道の整備に伴い、企業誘致および新産業の育成を図ります。地域の資源を活かした多様な産業が息づき、地域内における経済循環が活発な「自立」するまちづくりを目指します。



初夏の季節、大和地区に広がる「ユメシホウ」の畑。収穫の時期には辺り一面が黄金色に染まります。

10 小麦農家

小麦農家

飯島正義さん

桜川市産小麦「ユメシホウ」で夢を広げる

小麦は、世界で最も多く作られている農産物です。しかし、日本は輸入に依存しているため、国産の小麦は国内で消費される小麦の15%程度しかありません。パン用の小麦に至ってはわずか1%です。性質により小麦粉は、天ぷらや菓子類に適した薄力粉、お好み焼きやうどんなどに用いられる中力粉、パンや中華麺に向く強力粉に分けられます。このうち、県内では強力粉は生産されていませんでした。

飯島正義さんが長年作ってきたのは、農林61号という中力粉の小麦です。苦勞して作っても背が高いため倒伏しやすく、収穫量が減ってしまうといった悩みを抱えていました。そんな時に、以前相談のために訪れたことのあるつくば市の作物研究所から、従来の課題を



Profile
昭和11年桜川市生まれ。肉用牛の肥育、水稲転作物で初の大豆試作、集団転作の元祖として農水大臣に公認。最近では太陽光発電設備を導入するなど、常に先端技術を取り入れています。

克服した新しい小麦について試験栽培をしてほしいという依頼がありました。平成20年のことです。飯島さんは好奇心も手伝い、試行錯誤のうえ生産に取り組んだところ、タンパク質含有量13・5〜14・0%という驚異的な結果を出すことができました。県の奨励品種の「ユメカオリ」でも11%程度しか出ませんので、県の担当者からどうしたらそのような結果が出るのかという問合せが来るほど。新聞などでも紹介され、大手製粉会社も興味を示してくれました。これが



農林水産省の視察団に栽培法を説明する飯島さん

「ユメシホウ」です。現在は、米よりパンの方が多く消費される時代です。旨み成分の素グルテンが豊富で、背丈が低いことから倒伏しにくく収穫量も多い、製パンに適した小麦「ユメシホウ」は生産者にとってはまさに夢の広がる作物。JAも契約栽培に乗り出してくれましたので、これからは、多くの方が生産に取り組むようになるでしょう。「家族と苦勞を共にしながら、農業に従事できる事が本当に幸せです。関係者の皆様のご協力の賜物だと思えます。」と語る飯島さん。夫妻の笑顔がたいへん印象的でした。

Column 【新規作物研究会】 開発と販売で「ユメシホウ」の普及を

桜川市で試験栽培が行われた小麦「ユメシホウ」は、モチモチとした食感と、グルテンの含有量が多く、製パンに最適な小麦と言われています。しかし、どんなに素晴らしいものでも普及しないことには意味がありません。ここに注目したのが、市内に住む主婦たち。地元で生まれた小麦「ユメシホウ」を普及させることで、地域おこしにつなげていこうと新規作物研究会を作り「ユメシホウ」の小麦粉の生産と販売を始めました。

新規作物研究会のメンバーは15人。地元産の小麦粉でパンを作るという夢が四方に広がること、桜川市が、紫峰と呼ばれる筑波山麓に位置することから、「ゆめ紫峰」という文字をあてて独自ブランドの加工品開発も行っています。

本来はパン用小麦ですが、当初パン屋さんが市内になかったので、真壁高校にパンの製造許可を取ってもらい、パンの製造を依頼したそうです。代表の深谷みさほさんによると、「ユメシホウ」はパン以外にも適しているそうで、メンバリの経営するお店でうどんや、



市民祭の「反省会」に集まった新規作物研究会のメンバー

饅頭、ドーナツ、カステラ、スコーンなど市内を中心に販売しています。新規作物研究会として承認した商品には、オリジナルブランド「ゆめ紫峰」のラベルを貼ってアピールしているそうです。

また、真壁のひなまつりや桜まつりには、新規作物研究会として出店しています。パン焼き器を使って家庭でおいしいパンを食べてもらおうと「ユメシホウ」の小麦粉の販売を行うほか、メンバーが作った加工品の販売や、地元うどん業者の協力で開発した「ユメシホウ」100%の焼きそばの試食なども行っています。市民祭では地元商



うどん、パン、饅頭など多彩な開発商品群

自立 逞しく発展する創造の交響曲

市内の小学校で行われた食育教室の様子。地元産の「ユメシホウ」を使用し、生徒たちが自らの手で作った「サヤ」や「ひつま汁」を食べて、楽しく地産地消について学習しました。



市民祭での「ユメシホウ」関連商品の販売の様子。焼きそばの焼きそばをふるまったり、スイーツコンテストを開いたり、さまざまなアイデアを駆使して認知度の向上をはかっています。



西岡本店の先祖は、近江商人だそう。近隣の酒蔵にも同じ起源のところが多くあるのは、筑波山周辺が酒造りに適した磨かれた水が豊富で、そして良い米の産地だからと言えます。創業は1782年、現当主の西岡半右衛門さんで八代目です。平成13年に戻ってきて、日々の仕事のほか独立行政法人酒類総合研究所で酒造りや経営について学び、

18 技人 File

株式会社 西岡本店
地域交流でオール桜川市産の酒造り

平成22年に蔵を継がれました。最近では端麗辛口の酒が好まれています。西岡本店では流行に左右されない旨味のある酒を造ってきました。材料も地元産にこだわっています。食用米のコシヒカリもその一つ、コシヒカリで酒を造る



Profile
昭和50年桜川市生まれ。平成13年より独立行政法人酒類総合研究所にて酒造りや経営について学び、平成22年に株式会社 西岡本店の8代目当主となりました。

と酒米とは違う旨味が出て、味が深くなるのが特徴。そのため真壁高校の生徒さんが実習で作ったコシヒカリや、サクラサクリプロジェクトの協力で、地元ヤマザクラの花びらから抽出した酵母を酒造りに使った。



酒蔵での震災復興ライブ

西岡さんによると、新酒の飲み頃は、その年の秋あたりだそうです。また蔵の中にあるギャラリを地域に開放したり、震災復興を目的としたライブなども行ってきました。地域との交流から生まれる桜川ブランドの酒造り、これからの楽しみですね。

伝統の継承と地域活性化のため、地元高校と連携して行った、100%桜川市産原料による酒造り



より多くの人々に常陸秋そばを味わってもらおうと、「真壁のひなまつり」に出店。好評を博しました。

17 技人 File

いわせ蕎麦の会
桜川市を「そばの里」にしたい

全国のそば職人から高い評価を得ているのが、茨城県の奨励品種「常陸秋そば」。そば独特の香りや風味が強く、粒ぞろいで品質も優れています。桜川市は、常陸秋そばの作付面積が県内でも多い地域です。いわせ蕎麦の会代表の若林正美さんは、以前は農協の職員として、農業振興にも関わっていました。そばが好きで自宅にそば打ちの

ための部屋を作るほどでした。福島県のそば打ち名人に教えを乞い、平成12年にいわせ蕎麦の会をつくりました。主な活動は、各地のイベントへの出店やそば打ち体験の開催、そして会員の技術向上など。市民祭では



Profile
昭和11年桜川市生まれ。元岩瀬町農業協同組合 営農課長。農業法人 岩瀬アグリセンター取締役。平成12年にいわせ蕎麦の会を設立し、各地のイベントへの出店などの活動を行っています。



市内の小学校で行ったそば打ちの指導

自分たちの打ったそばを食べてもらう時の、お客さんの喜ぶ顔がうれしいと若林さん。桜川市を、そばの里にしたいという夢も語ってくれました。

代表 若林 正美さん

16 技人 File

小田部鑄造 株式会社
八百年の間培われてきた梵鐘造りの技

お寺の梵鐘を製造する会社は全国的にも少なく、関東では小田部鑄造株式会社が唯一の製造元です。小田部家の歴史によると創業は1172年で、勅許御鑄物師の称号を持つ先祖が、命を受け河内国(大阪府)からきたと伝えられています。勅許御鑄物師とは、宮中など公用の鑄物製造が認められた、高い技術を持つ鑄物師108人に与えら

れた称号です。37代目の小田部庄右衛門さんは、その流れをくむ一人で、伝統の技を今に伝えていきます。梵鐘は、銅と錫の合金を鑄型に流して作り、完成までには最低でも4か月を要します。通常は、仕上げに



Profile
昭和46年桜川市生まれ。国立高岡短期大学(現富山大学) 金属工芸科卒。盛岡市の鉄瓶工房で修業した後、25歳で小田部鑄造 株式会社を継ぎ、梵鐘の製造に取り組んでいます。



金属を鑄型に流す「鑄込み」

ある色に変化していきます。また、梵鐘に菊の紋章を入れるのを認められているのは小田部鑄造だけです。「梵鐘は、形だけではなく音にも注目してほしいですね。鑄物ならではの音色が、心を落ち着かせてくれます。」と小田部さんは語ります。800年の昔から、一つ一つに心と技を込めて造る小田部鑄造の梵鐘。これからも全国の寺院で、荘厳かつ余韻のある響きを奏でていくこと



溶鑄炉に材料を入れての溶解作業の様子。炉内の温度は最高約1,300℃に達します。

15 技人 File

瀬谷石材
「真壁石燈籠」の技術を伝える

桜川市は、国内有数のみかげ石の産地。市内のいたるところに「石」の看板を見かけます。石材業にかかわる人の多い土地ですが、石の仕事と言っても墓石や造園製品など様々。その中で古くからある真壁石燈籠の製造技術を伝えているのが伝統工芸士です。伝統工芸士とは、経済産業大臣が認めた伝統工芸品の産地特有の技術や技法の研鑽

と、伝統工芸の保存を目的に制定されたもの。県内では、結城紬や笠間焼に次いで3番目に真壁石燈籠が指定されました。伝統工芸士になるには、一定の実務経験の後、知識試験・実技試験の受験が必要で、真壁石燈籠では現



Profile
昭和49年桜川市生まれ。祖父の代から石関連の仕事に就く家系で、父親の指導により真壁石燈籠の技術を習得。33歳の時に伝統工芸士に認定されました。



永徳寺型

在25人が認定されています。瀬谷さんは、祖父の代から石関連の仕事に就いている家庭に生まれ、石燈籠は父親の指導で技術を磨いてきました。伝統工芸士に認定されたのは33歳の時でした。若い伝統工芸士は珍しく、修行中だと思われたこと

ともあったそうです。真壁石燈籠の特徴は、上部が大きい古代型のデザイン。主張しすぎない伝統的な形を踏まえて、職人一人ひとりが細かい部分は考えて作るそうです。大きさも、小さい物から4メートルを超えるような大型のものまで様々。「やり直しのきかない難しい仕事ですが、お客さまの喜ぶ顔を見ると苦労も感じないんです。」と、瀬谷さんは語ってくれました。



梵鐘
寺院の鐘楼に置かれている梵鐘（つり鐘）を造っている鋳物工場は、国内で7か所、関東では真壁地区にある小田部鋳造のみとなっています。小田部鋳造は800年の歴史を持ち、塗装をしない素肌仕上げが特徴です。最近、つり鐘型の風鈴が人気となっています。

豊かな自然の恵みをうけながら長い歳月をかけて磨かれてきた特産品の数々をご紹介します。



真壁石燈籠
江戸時代末期、久保田吉兵衛を祖とする真壁石燈籠は、厳しい弟子伝により伝えられ、平成7年に国の伝統的工芸品に指定されました。切り出しから仕上げまで18の技法が用いられ、繊細優雅な彫刻で知られています。



石製品
当市は日本を代表する石の産地です。加波山から切り出される良質な花崗岩（みかげ石）は墓石や燈籠に用いられ、この地域の発展に大きく貢献してきました。近年はガーデン製品やアート作品を手掛ける人も多くなり、新たな広がりをみせています。



べっ甲細工
亀の甲羅を加工するべっ甲細工は、真壁地区に住む刈部さん兄弟が父親から受け継いだもので、彫刻や蒔絵などにより、琥珀色に輝く装飾品へと生まれ変わります。



酒
豊かな米どころである当市では、古くから上質な日本酒の製造が行われてきました。山桜由来の酵母を使用するなど、新たな試みも盛んです。



醤油・味噌
地元産小麦などこだわりの原料を使用し、筑波山の伏流水で仕込まれる醤油・味噌。伝統の製法を守り、じっくりと時間をかけて作られています。



常陸そば
そば独特の香り、風味、甘みが強く、全国のそば職人から高い評価を得ています。品質日本一ともいわれ、当市での栽培も盛んです。



紅小玉スイカ
県の銘産地に指定されている紅小玉スイカは、甘くて美味しいと高い評価を受けています。4月から5月にかけて出荷されます。



米
温暖な気候と山からの美味しい水に恵まれた当市は水稲農業が盛んです。特に山裾の水田で作られているお米は、味・香りとも一級品です。



和菓子
当市は老舗の和菓子屋が多く軒を構えています。歴史を感じさせる町並みの中を散策しながら、和菓子めぐりが楽しめます。



ゆず加工品・梅ジャムなど
当市ではゆずなどの加工品づくりが盛んに行われています。ゆずマーメイドやゆず胡椒、完熟した梅だけを使ったジャムが人気です。



ゆず
さわやかな香りと酸味が自慢のゆずは、地域の活性化を目的に40年以上も前から育てられている特産品。冬の食卓に欠かせない味覚です。



酒寄みかん
温暖な筑波山の斜面を利用して、10月下旬から12月中旬にかけて9軒のみかん園がオープンします。コクのある甘酸っぱい味が好評です。



オリンピック
「幻のぶどう」とも呼ばれるオリンピックは、非常に糖度が高く、蜂蜜のように甘いのが特徴です。8月中旬から9月が出荷時期です。

一真堂は、昭和初期にパン屋として創業し、戦後に菓子製造も始めました。3代目の石川恵一さんと菓子専門店とし、現在パン製造はしていません。地域でも人気の「桜川謡曲もなか」は、先代が作り始めたもの。長く地域の人に愛されるようにと、地元の櫻川磯部稲村神社の花見物語をもとに、室町時代に世阿弥が作ったとされる謡曲「桜川」

20 一真堂

素材にこだわる「桜川謡曲もなか」

菓子職人 石川恵一さん

「いちなん」で名づけたそうなんです。最中というのは、餡を皮で包むだけのとてもシンプルな和菓子。それだけに作り手の想いがストレートに味や食感に出ます。特にこだわっている皮は、もち米だけを使いコシが出るよう杵と臼



Profile
昭和37年桜川市生まれ。平成15年に老舗菓子店・一真堂の3代目となりました。手間ひまを惜しまない昔ながらの製法を守り、地元で根ざした和菓子づくりを行っています。



「白あんパイ」の制作
質の小麦と白糖（氷砂糖）を

でついでいます。最中の皮にはでんぷんが使われることがありますが、石川さんは使用していません。サクサクとした食感と、口の中に貼りつかないのが特徴で、違いは一口味わうだけですぐに分かります。また、餡も上

質の小麦と白糖

糖を砕いた純度の高い砂糖に、井戸水を使ってじっくりと炊き上げています。栗などの具を入れることもあえて避けているそうです。
「すべては皮と餡そのものの味わいを引き出すためです。人の好みというのは、必ず最後にはシンプルなものに戻ってきますね。手間がかかりますが、喜んで食べていただくよう努力していきたい。」と、石川さんは語ります。



工場に併設されている直売所の前に佇む鈴木醸造(株)代表取締役の鈴木正徳さん

21 鈴木醸造株式会社

手間を惜しまないことが大切

代表取締役 鈴木正徳さん

鈴木家の先祖は、真壁氏に仕えていました。秋田に真壁氏が移った後は、主に農業を営んでいたようです。当時は、味噌や醤油は家で造るものでしたが、徐々に規模が大きくなって事業として造るようになったのは大正8年頃。それ以来、醤油と味噌の両方を製造しています。どちらも主原料は大豆ですが、醤油が大豆と小麦を麹にするのに対して、味噌は米だけを麹にするのが大きな違いです。現在、出荷する製品の約9割を醤油が占めています。醤油造りは昔から、

1. 麹（発酵）、2. 糀（もろみの管理）、3. 火入れ（殺菌・香りづけ）と言った、麹造りには最



Profile
昭和39年桜川市生まれ。平成10年に鈴木醸造株式会社の代表取締役に就任。昔ながらの製法と地元産の原料にこだわった味噌・醤油づくりに取り組んでいます。



ユメシホウを使用した「真壁」
また、できるだけ地産地消にこだわっていきたくて、と語っています。

も気を遣います。市販されている製品の多くは約5か月で造られていますが、鈴木醸造では創業以来使ってきた杉桶でゆっくりと発酵させるため、製品になるまでに1年、丸大豆醤油の場合1年半もかけています。また、原料の小麦を地元産の

ユメシホウに替えた製品「真壁」も開発しました。ユメシホウは、従来使っていた小麦よりグルテンが豊富なので、より旨味のある醤油の製造が可能となりました。
鈴木さんは「麹の管理は大変ですが、当社のポリシーは手間を惜しまずに良い製品を造り続けていくこと。」



春先の人気商品「さくら餅」を作る石川さん。一つ一つ丹誠を込めて手作りしています。



真壁祇園祭
開催日：7月23～26日
場所：真壁市街地

五所駒瀧神社の例祭で、400年の歴史を持つお祭りです。華やかに飾られた4台の山車が真壁の町並みの中を練り回ります。



7月

真壁祇園祭 神輿渡御（みこしときよ）
五所駒瀧神社から市街地へ向かう行列



岩瀬駅前夏まつり
開催日：7月下旬
場所：岩瀬駅前

岩瀬駅前を中心に行われる夏祭りです。子どもみこしも担がれ、みんなで楽しめるお祭りです。



納涼大会
開催日：8月中旬
場所：調整池（岩瀬中央公民館西側）

皆さんが楽しみにしている盆踊り大会です。帰省した人も加わり、やぐらを中心に人の輪ができます。



11月

桜川市民祭 in いわせ
開催日：11月上旬
場所：桜川市総合運動公園

さまざまな催事で賑わう市民祭。中でも、220kgのみかけ石を3人1組で25m引っ張る珍競技「世界みかけ石引き選手権大会」が人気です。



1月

さやどまわり
開催日：1月上旬
場所：大國玉神社

家内安全と五穀豊稔を祈願して行われるお祭りです。氏子の有志が、大楯に注連飾り（しめかざり）をした御祭神を担ぎ大太鼓を打ち鳴らし大國玉内の末社を走って巡ります。



くわ 鞆の祭
開催日：1月上旬
場所：大國玉神社

社殿の前庭に楯（さかき）の小枝で神田をつくり、翁の面をつけた神職が、楯で作った鞆で田を起し田植えまでのしぐさを行う農耕の神事です。



8月

かったて祭り
開催日：8月31日
場所：五所駒瀧神社

五所駒瀧神社の氏子たちが権現山山頂の富士浅間神社に神火を奉獻するお祭りです。山頂を目指して登る松明（たいまつ）の列は真壁に夏の終わりを告げる風物詩です。



12月

大飯祭り
開催日：12月第2日曜日
場所：下泉公民館

鹿島神社の氏子たちが、その年の当番の家を集まり物相（モノウツ）と呼ばれるお椀に高く盛りつけた飯を食べ合います。その年の作物の実りを神に感謝するとともに、人々の健康を願うための行事です。



ひむかしの 火渉祭
開催日：冬至の日
場所：加波山三枝神社

燃え盛る薪の上を素足で踏み入り、無病息災を祈るお祭りです。燃えさしを持ち帰り軒先に吊るすと病気がならないと言われています。



2月

真壁のひなまつり
開催日：2月4日～3月3日
場所：真壁市街地

「寒い中、真壁に来る人をもてなそう。」と真壁の住民の皆さんが考えたお祭りで、1か月間にわたり町中の家や店などにたくさんのお雛様が飾られます。



ようかまつり 八日祭り
開催日：2月8日
場所：真壁市桜井地区

そつりが地区の災厄を除けるという謂れから、巨大なそつりを編んで厄除け・無病息災を祈願する行事です。



4月

マダラ鬼神祭
開催日：4月第2日曜日
場所：雨引山薬法寺（雨引観音）

雨引山薬法寺の奇祭。兵火によって寺が焼失した際、住職の前にマダラ鬼神が現れ、大勢の鬼を使って寺を再建したという古事にちなみ、鬼神に感謝を捧げるお祭りです。



名勝「桜川」の桜まつり
開催日：4月上旬
場所：桜川市磯部桜川公園

名勝・磯部桜川公園で、桜の開花にあわせて、さまざまなイベントが開催されます。



大和の石まつり
開催日：4月中旬
場所：桜川市商工会大和事務所前駐車場

桜川市の特産品である石材加工品をPRするお祭りです。会場には石燈籠、オブジェ、墓石が並べられます。



3月

桜川市さくらマラソン大会
開催日：3月中旬
場所：桜川市総合運動公園

年齢や性別に応じたレースが行われ、市内外からおよそ2,000人のランナーが参加します。



まほろばの 大和流騎馬競技大会
開催日：4月上旬
場所：大和ホースパーク内

日本古来の伝統武芸である流騎馬を、スポーツとして全国に発信する大会です。50騎を超える騎馬武者が技を競い合う迫力は圧巻です。



あじさい祭
開催日：6月中旬～7月中旬
場所：雨引山薬法寺（雨引観音）

古くから信仰を集めてきた雨引山薬法寺は、桜、ツツジ、ボタン、アジサイなどが咲く花の名所としても有名です。特に梅雨の時期に咲くアジサイは人気があります。



6月

ツール・ド・さくらがわ
開催日：5月中旬
場所：桜川市周辺道路（近隣市町村含む）

新緑の季節に、桜川市周辺道路に設定したコースを自転車で行きます。競争するのではなく、交通規則を遵守して走ることを楽しむ大会です。県内外から大勢のサイクリストが参加します。



5月